



「野呂邦暢と出会った」



内嶋 善之助

三十八年前のこと。一人の芥川賞作家の講演会が、地元の島原商工会議所のホールで催された。私は、諫早市という近隣に住んでいるその作家が、どんな小説を書いていたかも知らなかった。顔見知りの書店から作家の受賞作を収めた本を買い、講演会の前に読み持参した。「草のつるぎ」という小説は、作家が十代の頃入隊していた自衛隊での経験がモチーフになっていて、臭いや光や音や空気や人物の機微が流れるような言葉の運びで書かれている。その頃、四百字詰め原稿用紙に小説や脚本を毎日のように書いていたので、どんな話をするのか興味があった。ただ、毎日殴り書きのような文章を思いつくままに書いて、それを小説にしようという未熟で安易な子供のような考えしかない私には、もっとも近くに住む芥川賞作家の小説作法を少しでも学びたいという一心で、講演会に行った。本屋がサインをしている作家の横でその本を売っていたが、部屋の隅で私は最後まで待って、他の聴衆がすべて帰った後に作家と対峙した。日常の観察から生み出される文章の大切さを語っていたが、二十一歳の私は何も理解していなかった。サインをもらい、少し話をし、そのことを日記に書いた。

野呂邦暢氏本人と会ったのは、その一度だけだ。それから三年あまりの間に、一度電話で話し、手紙と葉書のやりとりを五、六回やり、私は二十五歳になったときに作った原稿用紙百枚ほどのエッセーを印刷した小冊子を送った。それが最後だった。翌年、野呂邦暢氏は四十二歳で急死した。私は呆然となった。私が唯一届けた作品の感想を一言も聞くことなく、作家は夭折したのだ。

作家の返信は、いつも短い文章が書かれた葉書だった。その一枚には「古今東西の文学（特に古典）をたくさん読み、作品を書き続けること」とアドバイスが書かれていた。私はたくさん読まなかったけれど、書くことだけは続けた。私の原稿が初めて新聞に掲載されたのは、それから八年後の三十三歳のときだった。

今日まで、何度も文学を諦めかけたけれど、その度に「草のつるぎ」を読み返しては、書き続けている。作家の死後、私はようやく本当の野呂邦暢と出会ったのだろう。その本に書かれたサインは、三十八年間という時間を超えて、いまでも私の目の前に作家が語りかけたいくつもの言葉を思い出させる。

了